

キウイフルーツかいよう病の防除対策

1. はじめに

キウイフルーツかいよう病は葉の褐色斑点症状（写真1）、花蕾や新梢の枯死、樹液の流出などを引き起こし生産に及ぼす影響が非常に大きい。病原性が強いPsa3型の発生が確認されたことから、現地での防除対策について検討した。



写真1 キウイフルーツかいよう病（葉）

2. 試験方法

1) 発病部位切除の防除効果

2015年に樹液の流出が確認された2園地のヘイワード4本を用いた。樹液流出部からPCRで菌が検出されない部位まで遡って切除処理を行い、その後2年間の発病状況調査を行った。（試験園地は、2017年は5回の防除を実施）

2) 薬剤防除体系の検討

銅剤（コサイド3000、炭酸カルシウム剤200倍加用）を主体とした防除体系について、時期別散布で防除効果を検討した。

また、春季の強風雨の翌日に抗生物質剤（アグレプト水和剤1,000倍）の散布を行い応急的防除の効果を確認した。

3) 剪定枝及び切除枝の処理方法

剪定後の側枝を園地内で3~7ヶ月ビニール被覆処理し、枝内の菌の有無を培地とPCRにより調査した。

3. 結果

1) 発病部位切除の防除効果

発病部位の切除後は、2年間にわたり樹液の流出、葉の発病は認められず、ヘイワードにおいては発病部位の切除処理で高い防除効果が得られた。

2) 薬剤防除体系の検討

収穫後から開花期までの銅剤散布で高い防除効果が得られた。しかし、一部の品種では開花前後に葉の黄化などの薬害の発生が見られた

ことから、品種により銅剤の散布時期には注意が必要であった。

強風雨の翌日に抗生物質剤の応急散布を行ったところ、花蕾の発病は銅剤のみ散布区と比較して抑制された（図1）。

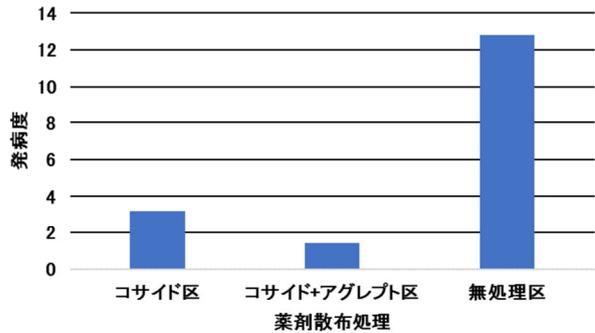


図1 強風雨後の抗生物質剤の発病抑制効果（花蕾）

4月~7月にかけての銅剤の時期別散布の結果、梅雨明け後の銅剤散布以降には発病葉率の増加はなかったことから、気温が上昇する梅雨明け後の夏季薬剤防除は不要であると考えられた。

3) 剪定枝及び切除枝の処理方法

いずれの処理も培地での生菌は確認されなかった。PCRによるかいよう病菌の検出率はビニール被覆区で低い傾向にあった。また、長期被覆することで、検出率は低下した（図2）。

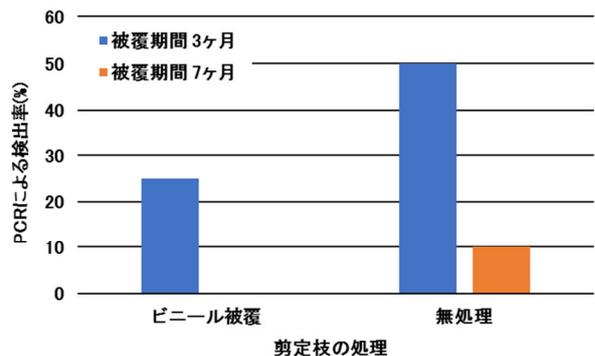


図2 被覆処理によるかいよう病菌の検出率（側枝）

4. まとめ

ヘイワードなどの抵抗性品種を植栽し、部分切除処理や薬剤防除などの防除対策を適切に実施することで、かいよう病菌の存在下においても継続的な栽培が可能であることが明らかとなった。

（病理昆虫室 主任研究員 青野 光男）